

宗岡二中だより 1月号



令和7年1月8日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

個性と社会性は表裏一体

校長 伊藤大輔

令和7年の幕開けです。今年も皆様にとって、幸多い年となりますよう祈念いたします。学校では、生徒たちが安心して安全な学校生活を送れるよう教職員一同、力を合わせて教育活動を行ってまいります。保護者・地域の皆様におかれましては、引き続きご支援を賜りますようお願いいたします。

さて年末年始に改めて学校の役割について考えました。そして、皆さんの「個性を伸長すること」と「社会性を育成すること」であると思に至りました。人は他者との関係、つまり社会の中で生きています。人は人によって人になるのです。その一方で、人は個として独立しています。人の内面にズカズカと他者は入り込めません。人は人として人であるのです。前者は社会性、後者は個性と言われます。私は両者は対立するのではなく、コインの裏表のように一体的に育つものと捉えています。

人は人生の道中でそれまで知らなかった知識・事柄・人々に出会い、自分とは異なる感覚や思想に出会い、そうした中であって「ああ、自分はこういう感じ方をするんだ。こういうことを考えているんだ」との気づきを積みみます。そして自分という輪郭が形づくられていきます。この営みこそ個性ではないか、と私は思います。そして個性は「社会一般に認知された行動・特性・能力等の中において、その人に強く備わっているもの」です。単に人と違うことをする、人ができない(すべきでない)ことをする、自己の価値観に基づいただけの勝手な振る舞いを指すものではありません。社会に根付いているのです。

子どもから大人までたくさんの人に愛されているドラえもん。その声を初めて担当した大山のぶ代さんが昨年鬼籍に入られました。実は大山さん、その個性的な「声」がコンプレックス、つまり、すごく嫌だ

ったのだそうです。「声がおかしいってみんなが笑うの。」「ヒソヒソみんながわたしを見て笑っている。」中学生になった時、同級生から「お前の声はおかしい」と言われてとても思い悩んでいました。自分の声が嫌だな、しゃべるのが恥ずかしいなど思っている大山さんに、あるときお母様がこう伝えます。

「あのね。目でも、手でも、足でも、そこが弱いと思って、弱いからといってかばってばかりいたら、ますます弱くなっちゃうのよ。弱いと思ったら、そこをドンドン使いなさい。声が悪いからって、黙ってばかりいたら、しまいには声も出なくなっちゃうわよ。あなたらしくもない。明日からドンドン声を出すように、何か声を出すようなクラブへ入りなさい。そこで声をたくさん出して、いくらかでも人様が聞き取りやすい声の出し方、お話の仕方を覚えなさい。」と。

お母さんの励ましもあって、それから、中学の3年間は放送部に所属しました。最初はバカにする人もいたけれど、自分で自分の声を「この声でいいんだ」と思えるようになったそうです。大山さんは他人がどう思うかではなく、これはわたしにしかない個性なんだ！と気付けたことで、自信が持て、劣等感を克服でき、そのことが、みんなから愛される「ドラえもん」の声を担当する道につながったと話しています。大山さんは自分の殻に閉じこもるのではなくお母様をはじめたくさんの人と関わる中で、自ら気付き、自ら変わっていったのです。

学校では人と人との励まし合い、ときには衝突し合いながら、社会性を鍛えます。そしてあなたが自身と深く向き合いながら、あなたの中にある個性という原石を磨きます。社会を支え、社会に寄与する個性を自らの力で見極め、光り輝かせてほしいと心から願っています。実り多い一年にしましょう。